

第一回「アートはクソでもある」

唐突に始まりました。美術家の新宅睦仁による沢マンアートコラム「独尊的な、あまりに独尊的な」。
このコーナー名は言うまでもなくニーチェの名著「人間的な、あまりに人間的な」を文字ったものである。
それはさておき、いったいおまえは何者かということ、まずはご説明させていただきたい。

名前：新宅 睦仁 (Shintaku Tomoni) ※本名
年齢：32 歳
出身：広島県
在住：東京都
婚姻：独身 (結婚歴なし)
身長：180cm
体重：65kg
生業：Web デザイナー
理想の生業：画家 / 現代美術家
趣味：読書、料理
特技：文筆
好きな食べ物：沢ガニ



……で、ほかに聞きたいことは？ というような強引な書き出しで十分におわかりいただけるかと思うが、この通り、他人の気持ちなんて汲む気のないエゴイスティック極まりない人間である。
そんな人間にコラムを書くようすすめた岡本明才さんがそもそもの間違いな気もするのだが、しかし、美術家としての大成を目論む小生としてはこの機会を活用しない手はない。
かつて小林秀雄は「批評とは、他人の作品をダシに使って自己を語る」ことだと言った。それを阿呆になって字義通りに受け取って、このコラムを書き進めていきたいと思う。

さて、ようやく本題に入ろう。今回はピエロ・マンゾーニの「芸術家の糞」を足掛かりに大風呂敷を広げたいと思う。とはいえ、ぼくがくどくどと説明するよりも、どう考えたって Wikipedia のほうが優れているので、ここは素直に引用したい。

”マンゾーニの最も重要な作品は、『芸術家の糞』である。これはマンゾーニ自身の排泄物を「30 グラム、自然保存」とラベルが貼られた金属製の缶詰に封印し、当日の 30 グラムの金の相場で売ったもの。資本主義社会での美術作品の在り方、芸術的価値と経済的交換価値の差異の問題、作品をアーティストの内面の表出とするロマン主義的芸術観などを皮肉る、画期的な反芸術的活動であった。”
(Wikipedia より引用)

この作品は、後日、市か県か、とにかくは行政が購入しようとして「市民の税金でウンコを買うとはなににごとだ！」と紛糾したという逸話がある。同様の話が、写真家のロバート・メイプルソープの展覧会の開催でもあった。彼の写真は、男女の陰部が赤裸々に撮影されていることはもちろん、作家自身がモデルとなり、アナルに SM 用のムチの柄を突っ込んでいるというような過激なものも多々あることから、それは美が猥褻かと今でも物議をかもしたりしている。こちらも「市民の税金で猥褻物を展示するとはなににごとか！」ということであった。もっとも、こちらは本当に展覧会が中止になったということだが。

こんな冗談のような本当の話は現代アートでは枚挙にいとまがない。これらのエピソードから浮かび上がるのは、「現代アートは価値が不明」ということだろう。そう、現代アートはウンコでさえも価値を持つのだ。
今日の現代アートは、いよいよなんでもありの状況を呈している。というか、事実、ほんとうになんでもありなのだ。

価値と無価値、正当と詐欺、高尚と低俗、それらの境界線の揺らぎの中にこそ、いや、その境界線上にこそ現代アートは存在する。
これほどエキサイティングな分野が他にあるだろうか。少なくとも、ぼくは知らない。

今後もそんなすばらしきアートの切れ端を、あやふやなテンションで適当に紹介していければと思う。
拙文によって、まずはぼく自身に、その次にアートそのものに、さらにその次に沢マンギャラリーに、少しでも関心を持っていただければ幸いです。